

令和元年度 算数・数学教育研究部会（読書会）報告

第1回

令和元年5月21日（火） 午後6時30分～ 総合学習センター

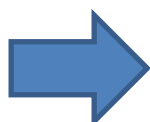
『令和元年：算数・数学教育への願い』

講師：愛知教育大学名誉教授 柴田 録治先生

★ 計算の指導

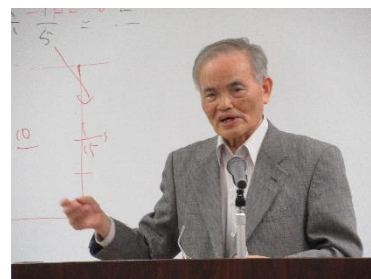
（昔）仕方を覚えて習熟

どういう場合に使うのかではなく計算方法を覚える。



（今）意義・よさ

学んでどういうよさがあるのかを認める。



★ 教育の変化

・教師中心 ⇒ 子ども中心

※すずめの学校（♪鞭を振り振り）からメダカの学校（♪誰が生徒か先生か）へ

・知識を使って生かす社会

★ 深い学び

・既存の知識と新たに学んだこととのつながりを大事にする。

・良い考え・正しい答えであっても、2つの Why を生かすこと。

① 「そう云えるのかな（信念を尋ね、わけを述べる場を設定する）」

② 「その様ないい考えを、どうやって思いついたのかな（発想を重視し、語らせる）」



★ 質疑応答

Q：間違っ問題への問い返しの方法はどのようにすればよいのか。

A：否定するのではなく、「どうやって求めたのかな」と認めてあげること。ほめてあげること。

また、間違いを取り上げることで学習が深まっていく。



《三浦謙次先生》

★ 深い学び

・学びをさせるために何をするか ⇒ 数学の心理に直結させたい

★ 問題を見つける

・【学習課題】ではなく、子どもが問題を見つけて解決する【問題解決】であるべき。

・何もないところから問題を見つける ⇒ 自分で解決していく（プログラミングの基）

★ 子ども中心

・義務教育は教授の場ではなく、学習の場である。子どもが学ぶもの。教師はサポート役でなければならない。

⇒教師の手立てによって、考えるきっかけとなったり、子どもが解決できるようになったりできるようにすること。

令和元年度1回目の読書会は「令和元年：算数・数学教育への願い」と題して、柴田録治先生、三浦謙次先生に講演していただきました。

今年度は、活動的な読書会にしようと考え、参加された先生方の意見交流の場として、グループ対話の時間を設けました。参加された先生方の声が聴ける有意義な読書会となりました。